

抗弁権のない者たちの死刑廃止の声 ——死刑囚永山則夫からの問い

市原 みちえ

死刑廃止運動の一つの象徴でもあった永山則夫を簡単に処刑させてしまった夏から、今夏で25年を迎える。冤罪でもない、政治犯でもない一般刑事犯は、発言権のない者たちなのだろうか？

無実の死刑囚から苦難の日々を超えて無実を勝ち取った免田栄さんは、冤罪の人ももちろん、罪を犯した人も等しく死刑はなくすべきと、一貫して死刑制度の廃止を求め続けた。免田さんの信念を共有する人々が増えて欲しい。

私たちはいつまで、生殺与奪の権利を権力に委ねるのだろうか？

「罪を犯した者」の一言で壁を作って、耳も傾けない不寛容な社会はもうやめにしてよう。

永山則夫は訴えていた。少数抹殺はファシズムを呼ぶ、と。

昨年末から「死刑になって死にたくて未知の人を殺傷」する悲しい事件が相次いだ。この国では、生きること苦闘し絶望する

人々にとって、死刑とは自殺のための最後の手段なのだろうか？ 政府からは一言のコメントも聞こえてこない。逆に、国会で議論もさせない静かなファシズムが深行している。ファシズム下では、死刑制度は人々を一層威嚇する。

俺の叫びを無駄にしないでくれ。

俺は非人に落ちたが

あなた方はまだ人間だ。

第2の永山を出さないでくれ！

これは、連続射殺魔と呼ばれた永山則夫のノート『無知の涙』の一節だ。

昨年は『無知の涙』の初版から50年だった事もあり、多くの紹介記事、著作が相次いだ。テーマは孤独、格差社会、貧困、差別、虐待だった。佐高信氏は新書『時代を撃つノンフィクション100』の中で「厳罰に処されるべきは貧困を生む社会、もしくは政治であるのに」と書いた。



故 永山則夫

永山ほど、自らの罪に向き合い反省した人間はいないと今は言われている。

1969年逮捕から数ヵ月後の20歳になったばかりの独房で、永山則夫が初めてペンと紙を求めて書いたその全文を週刊誌が独占掲載していたのが1969年9月初旬。永山則夫の内省の原点だったのではないかと思う。

「教えてください。教えてください。

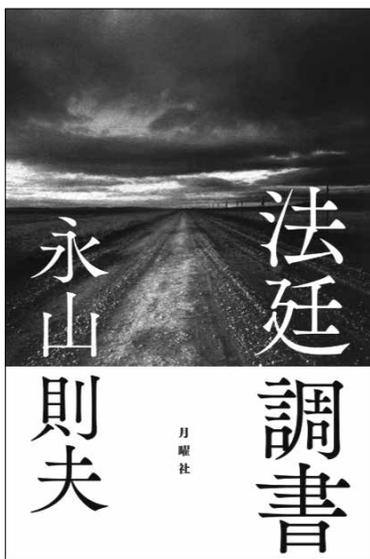
教えてください——」遺憾に思う心有り／されどその実は疑わしきかな／我これを何としよう／我れこれを何としよう／身に重き罪／我、小さき心に耐えかねるなり／ろうそくの灯にて／風あらば消えゆく思い／空の果てまで問うなり」

と、綴っていた。永山は、逮捕前「昭和44年4月4日、明治の森で消える日」と書

いたノートを残している。自らの行為の結果を自覚し、自殺または自首しようとしていた様子を書き留めたノートだが、警察は公表していない。

仲間殺しのない社会のために

同年4月6日、射殺願望で事務所侵入し待機したが、現れたのは警官ではなくガードマンと知り、逃走。明治の森で弾が出ず、自殺にも失敗。7日早朝、警官のいる方に向かい逮捕された後、独房で辞書を引きながら始めた学習で、知を獲得。原因、動機と結果に答えを出すころには獄外に共に闘う仲間を得て死刑囚として死刑の廃止を叫ぶようになっていた。「自分が切腹して被害者は生きかえってくれるならば喜んで死ぬ。が、生き返ってはくれない。だから4人の被害者の分も生きて、仲間殺しのない社会のために尽力しなくてはならん



だ」と。そして、生涯を通して贖罪の作業を自らに課した。「仲間殺しをなくすためにはどうしたら良いか。色々やっているが、それだけしかしていない」書き残し、最後の法廷でも語っている（※冊子が昨秋単行本『永山則夫 法定調書』に）。

永山は、ノート「詩」（出版にあたり「無知の涙」を付記）などのノート類と原稿、書簡、裁判関係書類など、直筆の資料を小山のように残した。その中から、昨年は「もう一つの1969年」と題して永山則夫の遺品展示を東京の3カ所で開催企画したが、東京都北区の子どもの本屋さん（青猫書房）での展示は今年で第6回になる。その前は、同じ赤羽の自宅の一部を改装したスペースで展示・資料公開し、何回かゲストを招いて永山則夫が残したものについて語ってもらった。先月亡くなった井垣康弘弁護士（元神戸少年事件の審判担当判事）が「私が判事ならば、少年院に送致した」と語った事を思いつく。

私が、永山の直筆の言葉、作品を直接見てもらう企画を続けている理由は、第一は、犯罪者にも死者にも抗弁権があると思うからだ。永山は他者が永山を語ったりして勝手に永山像が作られることを好まず、自ら伝えたがっていたし、書いたものを大量に

残している。2番目は、遺品を引き受けて初めて知った驚きや新事実があり。少年事件防止と更生の貴重な資料ともいえる。市民の共有財産にしてほしいからだ。

無学な少年の事件が権力に利用された

少年法適用年齢期限直前（20歳の前日まで）の「年迫少年」の起訴状は大忙しで作成される。起訴されるまで、少年への連日取り調べが密室で続く。東京、京都で2件の殺人、北海道、名古屋で2件の強盗殺人、他に1件、東京で銃刀法違反、住居不法侵入、殺人未遂傷害など計5件の起訴状が約2カ月のスピード作業で作られた。起訴状の中には、なぜか静岡での放火、住居不法侵入、窃盗、銃刀法違反、傷害未遂、公務執行妨害の事件がなかった。が、「静岡事件」は実際にあり証人もいる。本人が告白した時にはマスコミは報ぜず、鑑定書には「妄想」とされた。京都に続いて2件目の容疑者取り逃がし事件である。

19歳の怯えた若者は引き回しの刑にまず処せられ、フラッシュと罵声に囲まれ、両脇を抱える刑事の間に隠れるように身を沈めながらマスコミへの怒りが沸いてきたと後に書いている。少年はその時、自分を守ってくれた刑事の2人だけには話すといったが、後は、検察官、弁護士、家庭裁判所判

事、同調査官、鑑別所調査官、どれも大人が同じことを聞くと反発。口を開かなかった。「調査」の意味もわかりようがなかった。

則夫は北海道網走の冬に5歳で姉兄3人とともに両親に捨てられた。5ヵ月間、寒さと飢えに苦しんだ姉兄たちにも捨てられそうになる壮絶な体験の微かな記憶を紡ぎ、小説『木橋』等が生まれた。引き取られた青森の母の下で兄たちにサンドバッグのように殴られ虐待され、学校では教師からの差別をうけた。小学校欠席300日、中学は500日欠席。学習権からは遠い存在だったが、新聞配達だけは休まなかった。金の卵として集団就職の2年半後、路上生活と肉体労働と孤独と飢えに耐えられず、逃げ場を求めた自殺願望の少年は、射殺されることを望んで米軍基地に侵入。3回目に、たまたま留守宅から小型の女性護身用ピストルと弾をケネディコイン、時計などと一緒に手に入れた。逃げようとして怖くて撃ってしまったピストル。殺意はなかった。



いのちのギャラリートツィッターのアイコン

裁判では、永山

は「約7年間ほとんど語っていない。」「家族のことは語りたくなかった。弁護士とは何をするかわかっていなかった。自分を担当していた保護観察官が雇ったので信用できなかった。裁判とは何か、わかっていたなかった。」などと本人が書いています。

少年事件の場合の特徴として、家族との問題が関係する事が多く、その原因を作った相手を憎んではいるが、語りたがらない。刑事裁判ではなく少年審判が必要な理由の一つである。しかも永山の最初の弁護士は「辞め検」弁護士事務所の新任弁護士だった。補佐に検察庁退職の重鎮がついたからか、保護観察中の全国補導少年リストには永山があつたか否かも調べず、指紋でベタベタのはずのジャックナイフも証拠申請せず、のちに検察が「紛失」。警察が取り逃がして、被害者が「17、8歳の少年や」と言葉を残しているが、いつの間にか容疑者の年齢を変更、少年ではなく20代に。

独房に閉じ込められて永山少年は初めて安住の家を得、独学で、自分は同じ労働者、仲間が発砲していたと自覚する。そのきっかけは、被害者の家族の中に幼児がいて自分と同じ北海道の寒さに震える遺児を自分がつくってしまったと知ったこと。一晩号泣して「もう涙は流せない」と書く。

最下層の人々とエリート市民ともに反省・共立して、共に貧困・仲間殺しのない社会、死刑廃止、人類の解放へ進むべき理論を自ら追究。生きざまさらしとして小説を書き、19歳の少年事件を少年法改悪キャンペーンに利用した権力犯罪には徹底して贖い続けた。2審での無期判決は「少年事件であり、過酷な幼少年期に救いの手を差し伸べなかった社会保障の国家の責務も同時に問われるべき」としたものだだったが、マスコミは主旨を無視。戦後初の検察庁の上告の不当性にも沈黙（近代刑法の原則は、上告は被告の権利）。「量刑不当の上告理由は適法ではない」としながら、調査して審理したことを批判することもなかった。永山と弁護士たちは孤立無援の中での闘いを強いられ、表現者としての権利も「殺人者」だからと遮断され（日本文芸家協会入会問題）、支援運動も先細り。死刑確定後の支援は、たった一人の女性の肩に。支えきれず、支援の糸が途切れるのを待っていたかのように処刑された。が、永山則夫は、再審請求を準備し、書き続けた原稿の印税の送り先獄中の仲間へ、そして、自分の執筆活動のための本購入などの費用」を構想。贖罪の作業は続いていた。

永山則夫が残したもの

被害者遺族・遺児への印税贈呈をしても仲間を殺した無念は消えず。悪戦苦闘とも見える作業と作品と再審請求の裁判に向けて裁判資料の移動を求めた全てが途中の小山のような段ボール箱の中身。少しずつ引つ張りだして公開して、死者にも抗弁権があると東京の片隅で訴えている。最近嬉しいことが、起こっている。永山基準は、実は少年を死刑するための基準？ 国の責任を隠すもの？ と再検証が広がっている。

私は、永山の獄中手記『無知の涙』の読者でファン。独自に支援はしたが、個人的理由で死刑確定前に途絶。確定から7年後、永山則夫の身柄引受人候補として何年ぶりで面会出来た。が、4日後に処刑されたと知って茫然自失。自分が永山さんを殺したと眩き、涙が止まらなかつた。が、飛んで行く勇氣もなかつた。なのに、希望して遺品を記録・保管している。永山が残したものの散逸を防ぎたかつたからだ。後悔ばかりが今でもあるが、あの日会えて良かったと思うようになった。永山があの時思っていること、言葉を直接聞けたからだ。

「新谷（のり子）さんと協力して、出せなかつた原稿を出版して、印税を、世界の、

日本の、〇〇〇の貧しい子どもたちへ送るのね」(〇〇〇は、処刑後ペルーと知った。ペルーの働く子ども・若者たちは、永山の『無知の涙』を体で理解し、交流と寄付は今も続いている。)

今夏は処刑から25年になる。ポツポツ永山からの宿題に正面から向き合いたいと思う。

つい先日のお彼岸に、東京拘置所の無縁仏納骨堂に「鍵開けて！」死刑を考えるお参りツアーをした。死んで罪を償ったはずの人達がフェンスに囲まれ二重の鍵と鉄製ゲートの中に今も閉じ込められていることを網走の海に眠る永山則夫は怒りを込めて見守っているだろう。1年を通じて2ヵ月

に1回、死刑と司法を考えるプリズンアカデミー・カフェを企画。番外編のお彼岸ツアーだった。

仲間を、自分をころすな！ 権力に殺されるな！ 見殺しにするな！ 武器もない。死刑を止めよう！ 全ての子どもたち、若者が幸せに生きられる社会へ！

東京の下町の子どもの本屋さんでの展示は、今年も永山少年が事件を起こした時節——公園ベンチや軽トラックの荷台で寒くて深夜目が覚めるころ、2022年10月12日〜11月4日の4週間に決定。絵本に囲まれていつも思うことがある。せめて1冊でも則夫のための絵本があり、誰かが一緒に読んでくれていたら、と。

ささやかな活動です。どうぞ、一緒に。

(いちほら・みちえいのちのギャラリー代表)

連絡先

inochino-gallery@protonmail.com

090-9333-8807

Twitter <https://twitter.com/InochinoG>



雑司ヶ谷納骨堂お彼岸参り (2022年3月20日)